# スポーツとインバウンド

札幌の大通公園は観光スポットとしてよく知られる一方、市民の憩いの場でもある。この季節になると、お天気の昼どきには、近くのオフィスに勤める人々や子ども連れの親子が、芝生やベンチでお弁当を広げることも少なくない。

そんな大通公園で１６年前に出会った一つの印象的な光景が、今も目に焼き付いている。

５月末だったか６月上旬だったか。よく晴れたある日の昼下がり。公園を散歩していると、小さな男の子２人がサッカーボールを蹴り合っている姿が目に入った。

髪が金色の欧米系らしき男の子はサッカー・ワールドカップ（W杯）のイングランド代表、日本人と思われる男の子は日本代表のユニホームを身につけていた。背番号はともに「７」。両チームの中心であるデービッド・ベッカム選手、中田英寿選手になりきってボールを操る２人の様子は、とてもほほ笑ましかった。

サッカー・ワールドカップの日韓大会が開かれたこの年、札幌ドームでもドイツ対サウジアラビア、イタリア対エクアドル、アルゼンチン対イングランドの３試合が行われた。それぞれの国のサポーターが札幌に集結し、札幌は国際都市の様相を呈した。

２人の男の子も、親と一緒に札幌へやってきて、ユニホーム姿のサッカー好きに遭遇。言葉は通じないものの、同好の士と直感し、ボールをやりとりしながら心を通じ合わせた。
それが、あの光景だったと信じている。

スポーツは観光客の誘致で侮れない力を発揮する。

プロ野球で、今は巨人に移籍した台湾出身の陽岱鋼選手は、札幌を本拠地とする北海道日本ハムでその豊かな才能を開花させた。日ハムの試合は台湾のケーブルテレビ（ＣＡＴＶ）でも中継され、２０１６年のシーズンには球団の集計で推定１万人の台湾人客が日ハムの主催試合に来場したという。

また、サッカーＪ１の北海道コンサドーレ札幌には、「タイのメッシ」の異名を持つチャナティップ選手が昨季から在籍。今季は札幌のＪ１上位進出を支える働きぶりを示している。活躍はタイでも詳しく報道されているようで、「サッポロ」という土地の存在を知らしめた。

冬のスポーツでも雪質の良さが知れ渡りはじめ、世界のスキーヤーを呼び寄せている。先駆けとなったニセコ地域は別荘や大型コンドミニアムの建設が相次ぎ、地元倶知安町の地価は上昇の一途をたどっている。

豊かな自然、温泉、梅雨のない爽やかな気候、おいしい海の幸と山の幸、函館や小樽のロマンあふれる街並み。北海道はもともと観光資源に恵まれた土地柄といえる。国内に限れば、他の地域から「北海道はもともと有名だから、観光ＰＲの必要なんかないのでは」とうらやましがられるほどである。

しかし、世界の中で見ればどうなのだろう。確かに札幌や函館などでは、韓国や中国、台湾など近隣諸国からの観光客がまちを歩く姿を、ごく普通に見かけるようになった。ただニセコ地域など一部を除けば、欧米の観光客を呼び込む余地はまだまだありそうだ。

知名度が上昇している折でもある。来年はラグビーのワールドカップが札幌でも開催される。札幌市は冬季五輪・パラリンピックの誘致を目指している。こうした機会を捉え、北海道の魅力をこれまで以上に強く内外にアピールしたい。

それには、欧州や米本土などからの直行便開設や、北海道新幹線の札幌延伸前倒しなど、北海道へのアクセス向上が求められよう。

心配なのは、ＪＲ北海道が単独では維持困難とする赤字路線の整理を進めようとしていることだ。遠くからやってくる観光客にとって、鉄道は使いやすい交通インフラのはず。慎重な検討が欠かせない。

北海道新聞社　論説委員室主幹　川嶋　信義